

# 宗教サイトにおける CMC 空間の諸相について

—教団公式サイトと新靈性文化的個人サイトの比較より—

榎本 香織

## はじめに

90年代以降のインターネットの飛躍的発達、我々の日常のコミュニケーションの形態を大きく変化させた。そして掲示板やメール等のコンピュータを介したコミュニケーション (Computer Mediated Communications, CMC) の持つ可能性と問題は、多くの分野で今なお頻繁に語られている。宗教の分野においても、各宗教団体が公式サイトを持つことはもはや「常識」であり、yahoo!等の検索ツールを使用すれば数千の宗教サイトが見つかるだろう<sup>(1)</sup>、さらに個人が運営するサイトを含めればその数を把握するのは非常に困難なものとなるだろう。宗教教団の公式サイトが提供するの、教義内容や行事案内など、その団体に関する基本情報の提供が主であり、インターネット最大の特徴の一つである、不特定多数の人々のコミュニケーションの場である掲示板 (Bulletin Board System, BBS) を設置するサイトは殆ど見かけない。

逆に個人が運営する宗教的内容を含むサイトの場合、BBS を設置しているところも多く、場所によっては活発にコミュニケーションが展開されているような所も存在する。BBS は、参加者が匿名性に守られるが故に、「自己の内面を正直に語ることのできる場」「〈ほんとう〉の自分でいられる場」として機能すると言われており、時には日常生活の空間においては語ることのできない、深い次元の心の悩みや宗教観などが、この場では容易く語られることもある。それ故に CMC は、参加者からすれば個人的な宗教対話の場や同じような価値観を持つ仲間との連帯の場、すなわち個人的宗教実践の場となりうる可能性を持つ。これは、特定の教団に頼らずに自立的な個人の靈性開発を目指す「新靈性文化」<sup>(2)</sup>の文脈と、非常に密接に関わってくるものであると言えよう。

新靈性文化は、教会や寺院等の特定の聖所のみならず、日常の空間において、身近な存在を通して靈的なものに触れることができるとする。またこの文化の文脈においては、個人の自立とゆるやかなネットワークが重視される。本稿では、既成宗教の公式サイトと、新靈性文化的な文脈に位置すると思われる個人運営サイトの例を取り上げ、そこでの交流のあり方の違いについて述べ、その違いが実社会に対する影響力や、メディアをめぐる言説の多様性が生む不安定さに対する姿勢に起因することを説明する。そして最後に、それぞれの CMC 交流のありかたについての限界や展望についても多少の考察を加えたいと思う<sup>(3)</sup>。

## 1. CMC の体験をめぐる言説

まずは CMC の基本的機能について説明するため、代表的な CMC 交流に関する研究を取り上げ、そこでの体験が一般的にどのように語られているかを紹介する。

## ラインゴールドの WELL 体験

CMC の体験について、自らの経験をもとに詳細に述べたものとして、ハワード・ラインゴールドの『ヴァーチャル・コミュニティ』<sup>(4)</sup> (1994) が挙げられよう。ノンフィクション作家である彼は、執筆活動の合間に、大規模なコミュニティサイトである「The WELL」に通い出す。そしてそのコミュニティに次第に魅力を感じるようになる。

見かけ上はまったく血の通っていない、単なる技術の儀式にすぎないものに、これほどのめり込んでいるのは私一人だけではない。[...] WELL に出会ったことは、家の壁の裏に隠れていた、それまで自分の知らないところで発展してきた居心地のいい小さな世界を発見したようなものだった<sup>(5)</sup>。

彼は WELL の中でも特に「子育て会議」のコミュニティに足繁く通うようになり、そこで重要な体験をすることになる。WELL メンバーの一人であるジェイ・アリソンが、病院で生命維持装置に繋がれた生後 14 ヶ月の娘の様子を、数週間にわたってリアルタイムで WELL 上に投稿した記事を読み、ラインゴールドは次のように述べる。

コンピュータの前に座る私たちの胸の鼓動は高まり、目からは涙が溢れる<sup>(6)</sup>。

また、リアルタイムで記事を寄せたアリソン自身も、後にこの時の経験を次のように語る。

それまでは、私にとってコンピュータの画面は決して慰めになるような場所ではなかった。それとはおよそ縁遠いものだった。ところがどうだろう。娘のそばで深夜コンピュータに向かい WELL にアクセスし、歩き回る。私はその夜、[...] 目に見えないコミュニティに支えを求めた。[...] どんな困難でも一人で耐えるほど辛いことはない。判断の基準や寄りかかる支えがないのだから。自分の日誌をコンピュータと電話回線を通して入力し投稿することで、私は [...] 友情や安らぎを見出したのだった<sup>(7)</sup>。

この会議室は「まるで魔法のお守りの輪に取り囲まれている」場であり、他のテーマの会議室で辛辣な言葉を投げ、知的に敵対するような人々でもここでは「小さくとも暖かく人間的な一面」を見せる場であったと、ラインゴールドは述べる。そして、こうした感覚は、決して自らが参加していた「子育て会議」に限定されるものではないというのが彼の主張である。

真の精神的なコミュニオンを、ラインゴールドは CMC 空間に認めていたのである。実生活の空間からコミュニティの空間が消えていくにつれて、共生のために集う場が要求されるようになる。ラインゴールドは、ヴァーチャル・コミュニティはこの渴望を満たす可能性を持つものとして期待している。こうした地域的なネットワークはやがて国境を越えて発展し、世界規模のネットワークという、より広い領域への入り口になると彼は語る。自らが CMC 体験者であると同時にオブザーバーでもあった著者が著した『ヴァーチャル・コミュニティ』は、その実体験が語る重さと相まって説得力を持った結果、「新たな人間的な繋がり」の側面をオンラインコミュニティに見出した草分け的存在としての地位を確立したのである。

## CMC 空間参入による没入と「魂」の交流

アリソンが病院から WELL 上に投稿したリアルタイムの発言を読み、「今まさに」その場での体験を共有しているかのごとく涙する。またはアリソン自身がそれを書くことによって、WELL

上での繋がりに安らぎを求める。CMC 空間への没入が生み出すこうした精神的連帯やカタルシスの体験は、ラインゴールドや当時のメンバーのみが特別に体験していたものではない。ラインゴールドのように CMC に親和性を持つものならば認めるであろうこの「精神にある種の揺さぶりをかけるような体験」は、後の CMC をめぐる言説の中でもしばしば「魂」というイメージを以て語られることがある。

例えば精神科医の大平健が患者として接した男性は、インターネット上で知り合った女性とのつながりを「魂の付き合い」と表現した。この男性は、魂の交流が生まれるインターネット上でコミュニケーションの体験を次のように語っている。

何度も何度も文章を練り直していると、「何か自分の想いがグーッと凝縮するみたいな感じ」がしてくる。そして、最後に送信のボタンを押すと […] その「凝縮」した自分の想いがケーブルを通して進み、交換機やサーバーを通過していくうちに「ろ過」されて、ますます「ピュア」になって、彼女のパソコンへ届く。[…] 彼女の「想い」も、自分と同じルートを逆向きに通って来て、目の前のディスプレイに到達するのだ。人間の魂とはこんな風に体を離れて行き来するものだったのか<sup>(8)</sup>。

また、パソコン通信を題材にした乗越たかおの小説『アポクリファ』では、CMC のメンバーの一人が実は既に死亡していた女性の「魂」であり、その「魂」である彼女が、パソコン通信で「繋がる」人々を次のように例えて語る。

…ときどきこんな夢を見たの。私がすごく上空から日本を見下ろしているのね。そうすると日本中にまるで人間の神経繊維みたいに張り巡らされた電話線という電話線の光ファイバーが、キラキラ光っているの。そして誰かがアクセスする度に、まるで胎児の血管に母親の血液が送り込まれるように、光ファイバーの光がどどんまばゆくなっていくのよ。 […] 別に、(サイバー・パンクのような) 脳に端子を直接つなぐような SF じゃなくてね。もっと「大きなものをつながる安らぎ」ってあるでしょ。昔の人が感じた「神に抱かれるような安らぎ」って、こういうものだったんじゃないかしら?<sup>(9)</sup>

語り手に実体がない(=死者が語る)という小説の設定は、対話する相手が普通の人間であるという暗黙の前提がここでは取り払われることを示し、電子空間内で巡り会う他者の存在の曖昧さや虚構性を象徴しているという解釈も可能であろう。だが、ここでは語り手が靈魂であること、そしてその靈魂がその高い次元の視点でネットワーク世界の有機的連帯感を俯瞰し語ることにより、普段パソコンのネットワークコミュニティを通じて利用者達が直観的に感じ取っている類似体験が、より精神的・靈性的な性質ものへと昇華される性質のものであることを示唆している、という解釈も可能であろう。

さらには CMC でのメタフィジカルな繋がりを、自己変容、自己理解の促進等による自己解放をもたらすものとして、宗教における絶対者とのインタラクションとの類似性を考察した論文も近年になって登場している<sup>(10)</sup>。オンライン空間上でのヴァーチャル・リアリティがもたらす「つながり」の体験は、今日の宗教とインターネットとのインタラクションにおいて筆者が重要な意味を持つのではないかと考えているものの一つで、これは CMC への没入によってもたらされる、より高次の意識へのシフトと、そこから導き出される、より高度な次元における連帯感覚によつ

て導き出されるものであると考えられる。これは「スピリチュアリティ (spirituality)」<sup>(11)</sup>という概念、すなわち新靈性文化の文脈で語られる「靈的ネットワーク」の概念と、決して不可分のものではないのである。

宗教的文脈の中に CMC を位置づけるとしたら、CMC に自主的に参加し、その連帯の中へ「没入」することによって得られる「カタルシスの側面」、日常とは異なる地平で他者と語ることによって体感する「意識変容による自己解放の側面」そしてそれらを総合して得られる「ゆるやかな靈的ネットワークの形成の側面」を上げることができるだろう。これらは、明確な集団的組織形態をとらないが、個々人の思想や態度の深い部分に根を下ろすという新靈性文化の定義の諸要素と共通した特徴であると言えることができる<sup>(12)</sup>。

## 2. 宗教的オンラインコミュニティの諸相

CMC は現代において既に日常生活の中にも浸透・定着し、誰でも自分の関心や興味に該当したテーマのコミュニティサイトに参加することができる。そのコミュニティの質によっては、たとえ「顔 (文字通りの顔・表情の他、職業や居住区・社会的地位などの「顔」も含まれる)」の見えない他者とであれ、深い連帯感を得ることさえ可能である。CMC は人と人とを一面的にではあれ、精神的に繋げることのできる強力なツールとなり得るのだが、そうしたツールが実際の現場ではどのようなものとして捉えられているのかを、宗教サイトにおける利用の現状を通じて見てみたい。宗教的な領域においては、オンラインコミュニティはどのようなものとして捉えられているのか、ここでは CMC 交流が活発に行われていると見られる例と、CMC を設置しようとしながらも断念せざるを得なかった例を挙げ、その背景を追ってみたい。

### (1) 新靈性文化的個人サイトによる CMC 交流

#### 「心霊学研究所」の設置例より

新靈性文化の主たる特徴に「個人の自立性の重視」「集団による拘束の否定」「緩やかなネットワーク」などが挙げられるが、CMC はまさにそれらの特性を実現させるものでもあると言える。個人は自らの選択で数あるコミュニティサイトを選択でき、参加も撤退も自由である。そして参加することによって、緩やかながらも精神的なネットワークを形成することも可能である。それぞれのライフスタイルに合わせた選択と参加が保証されるという意味においては CMC は既成宗教よりは新靈性文化の文脈とより親和性をもつものであると言えるであろう。

CMC がアクティブに機能している宗教的サイトの一例として、あるスピリチュアリズム<sup>(13)</sup>関連サイト(「心霊学研究所」)<sup>(14)</sup>の例を挙げてみたい。筆者が観察する限りにおいては、このサイトは個人運営の宗教サイトとしては比較的長寿で大規模、なおかつ安定した秩序が維持されているサイトで、CMC を通して参加者達は、緩やかながらも靈的知識や体験の共有を行っていると言える。インターネット上でのサイト開設は 1999 年、その前身はニフティのフォーラム上で展開されていた (1995 年 - 1999 年)。

前身が電子会議室であったこともあり、インターネットに移行してからもコミュニケーションの場である BBS は引き継がれ、さらにスピリチュアリズム関連の書籍やリンク集などのデータベースが拡充された<sup>(15)</sup>。それによりこのサイトはスピリチュアリズムに関する一種の総合サイトとしての側面を持つとも言えることができるだろう。

それでもやはりこのサイトにおける最大の特徴は、BBS における活発な交流活動である。数名の常連達や初めて参加する人々が一緒になって展開する話題は、時事問題や個人の悩み相談、他宗教との比較論議、他のカルト的サイトに対する論議など、その都度流動的に変化するが、それらの話題の根底には、彼らの思想基盤であるスピリチュアリズムが存在している。ここでの交流はスピリチュアリズム的思想が根幹にあり、それを様々な話題と関連づけて参加者達が連帯意識を共有するという大きな流れがある。そしてときおり、その BBS 自体の存在意義についても触れられることがある。以下にこのサイトに集まる参加者達が BBS 上に投稿した、掲示板における CMC 交流における所感を挙げる。プライバシーの問題から完全な引用を避けたが、発言者の発言内容になるべく忠実に沿ったものとした。

(A) インターネットの素晴らしい面は、時間と空間を越えてお互いを高めることができます。実際このようなサイトがなかったら、様々な問題について誰かと議論する機会は一生なかったかも知れません。

(B) もしこの掲示板がなければ、いくら『靈訓』(スピリチュアリズムにおける主要なテキストの一つ：筆者注)に感銘を受けても、スピリチュアリズムについてそれ以上の深化はできなかったし、挫折していたかも知れません。この掲示板の存在に大変感謝しています。

(C) 参加しているうちに不思議に思うのは、参加者がお互い誰だか知らないのに、そのなかで連帯感や友情のようなものまで生じるということです。

不特定多数者による CMC 交流を可能たらしめる BBS は、参加者達にとって精神的支えを得る場であり、同じ宗教的価値観を共有する者同士の交流の場であると言える。なぜならば他の既成宗教や新宗教教団等とは異なり、スピリチュアリズムという思想形態は伝統的に、集団・組織化を否定する傾向にあるからである。

もともとスピリチュアリズムは欧米に源流をもつものであるが、大正時代に日本に流入された後も、新宗教にその一部が組み込まれた流れを除いては、この傾向は変わらないと言える。さらに近年の新霊性文化の潮流と相まって、この傾向はより強くなったと言えるだろう。実際、スピリチュアリズムの霊的布教を目的とした教会や団体は存在せず、「勉強会」という形態で数名の有志が集まって読書会を開く、等のグループが幾つか確認できたのみであった<sup>(16)</sup>。そうしたことから、CMC は、教会や聖堂、集会所など、交流のための物理的基盤を持たなかった人々にとっては、それまで欠如していた物理的連帯を補強する作用があると考えられる。基本的に個人の学習と実践に委ねられる傾向の強いスピリチュアリズムが日常生活の空間で語られる機会は少なく、インターネットという場によってその交流がより盛んになったことを考えると、CMC はそれまで各地に点在していたスピリチュアリズム実践者、もしくは関心のある人々を連結、集結させる機能をもつと言えるだろう。

## (2) 「公式」サイトによる交流空間創出の困難さ

### 日本基督教団西東京教区公式サイト<sup>(17)</sup>設置例から

「心霊学研究所」のように、個人が運営するサイトは、個人の運営方針に従って自由なサイト構築が可能である。BBS 設置等もサイト管理者の運営管理次第では、単なる情報交換のための場としてのみならず、参加者達にとって非常に意味のある「つながりの場」となるだろう。しかし

こうした例はむしろ宗教サイト全般においては少数派であり、特に教団やグループの「公式」サイトとなると BBS などの開放された交流の場の設置については様々な制限が運営上に課せられる。その現状の一例を、日本基督教団西東京教区公式サイト設立の経緯を通じて見てみたい。以下は武蔵野扶桑教会牧師兼臨床心理士で、公式サイト設立に携わった当時の代表者 F 氏の話をもとにしたものである。

西東京教区公式サイトは、「カオスとしてのインターネットの中からコスモスを構築する」という意図を以て設立された。サイトの内容は一過性の情報（行事案内等）と恒久的な情報（神の言葉）を主としており、データベースとしての機能が主であると言えよう。当サイトにおいては他教区との情報交換やオンラインネットワークの構築を目的とし、かつサイトを設立し情報提供をすることによって、一般の人と教会との間にそびえる高い敷居を低くするという期待もあった。不特定多数の閲覧者との出会いと交流のための BBS 設置も当初は検討されていたが、常連による BBS 占有が一般者排除の可能性を持つこと、またゴシップなどによって BBS の秩序が荒らされる可能性から断念したという<sup>(18)</sup>。

F 氏は臨床心理士でもあることから、メールによるカウンセリングの体験もあるが、相談は信徒であったり F 氏を臨床心理士と知っている人からの指名によってなされることが殆どであり、教会のサイトを偶然に発見し、宗教的な相談を受けたという人は今のところ皆無であるという。またそうした活動が布教目的を伴ってはならないということも氏は語っていた。臨床心理士としてのメールカウンセリング活動と、教団サイトでの活動は、氏にとっては全くの別物であるという。また、不特定多数に対して解放された BBS と一対一のメールとは、コンピュータを介したコミュニケーションであるとはいえ、その様相はかなり異なるものであることも留意しなければならない。

西東京教区公式サイト設立の経緯を辿ると、そこには公式サイト組織運営としての BBS 設置の難しさが見えてくる。個人的な質問や社会のことについて質問が投稿された場合、個人が教団と無関係で回答することは容易だが、組織を代表とした回答を出すにはまず内部で意見統一された回答でなければサイト上に公開することができないとする宗教教団は多い<sup>(19)</sup>。また、実社会とのインタラクションが、個人サイトや新霊性文化上の文脈にあるサイト以上に密接であることもオンライン上の交流を困難にする原因であると考えられる。実社会に大きな影響力を持つ教団ほど、サイト上の発言の影響がそのまま実社会へ連動する可能性も大きいといえる。それゆえに他の個人サイトや新霊性運動系列のサイトと比較しても、発言に慎重な態度をとらざるを得ないという見解と、その結果としての開放された交流空間の構築の断念は、当然の帰結であると言えよう。

### 3. CMC 交流と電子メディア空間の「あやうさ」—メディア論的言説の多様性から—

宗教形態やサイトの運営体制によって、CMC に対する態度に差が出るのはなぜであろうか。実社会に対する発言の責任所在の明確さも一つの要因であろうが、さらにもう一つ重要なのが、CMC の構築される場である、電子メディア空間そのものの持つ多様な側面にあると考えられるのではないだろうか。パソコンが誕生し、インターネットが日常生活の中に浸透したとはいえ、まだその歴史は他のメディアよりも浅く、電子メディアとその創出する空間に関する言説も多種多様である。そのメディア空間に対するアプローチも、その機能に特化して述べられたものから

実社会との関連性を説くもの、肯定的な未来を予想するものから幻想にすぎないという悲観的な見方をするものまで、相反するアプローチが一つの空間に対してなされているのが現状であると言えよう。

80-90年代以降、ちょうどパソコン誕生やパソコン通信普及と同時並行して、電子メディア空間を巡った様々な言説が誕生する。ここでは少しだけマクロな視点から電子メディアと人間の関わり合いをめぐるいくつかの言説について触れてみたい。そもそもメディア空間に対して今までにどのような視座が構築されてきたのか、その様相を俯瞰することにより、宗教とインターネットとの関わり合いの難しさの要因を探ることができるのではないかと考えられるためである。

以下は、メディア空間に関する主な言説を筆者なりに四点にまとめたものである。前者二点はメディア空間と実社会とのインタラクションに関連する言説、後者二点はメディア空間自体に対する肯定的/否定的態度に関連する言説である。

### (1) マクルーハンの再評価

80年代に入ると、パソコンと人間の関わり合いを巡り、様々な言説が浮上したことは先述の通りであるが、メディアの持つ力そのものについて、60年代に既に「予言」していたマクルーハンが再評価されたのもこの時期からである。

マーシャル・マクルーハンはトロント大学で英文学の教授をしていたが、1964年に出版した『メディアの理解』（邦訳は『メディア論』）によってメディア自体の持つ「力」を説いたことにより、メディア論の先駆者として注目される。それまでメディアとは情報を伝達する純粋透明な容器として捉えられるのが普通で、「メディアの種類によって異なる社会や世界認識を形成する」という認識は存在しなかった。メディアによって伝達される情報内容のみが注目され、メディアはそれらメッセージを伝えるための伝達通路にすぎないという見方を、マクルーハンは批判したのである。マクルーハンが強調したかったのは、「メディアそのものが持つ力」の存在であった。鉄道为例に挙げ、それが持つメディア的な力を、マクルーハンは次のように説明する。

鉄道は移動とか輸送とか車輪とか線路とかを人間の社会に導入したのではない。それ以前の「人間の機能のスケールを加速拡大し」、その結果まったく新しい種類の都市や新しい種類の労働や余暇を生み出したのである（「」は筆者の付加）<sup>(20)</sup>。

マクルーハンは、外化されたテクノロジーが、今度は逆に人間の感覚に反作用し、社会的・心理的に新しい経験の形式を形成する。つまり人間の経験と関係とを構造化する力を「メディアはメッセージ」という言葉をもって表現したのである。

また、マクルーハンの創出した概念でもう一つ大切なのは「グローバル・ヴィレッジ」の発想であろう。電気的なテクノロジーの発達によって、地理的距離が無化され、電子的に媒介された同時的な場が至る所に出現するという主張である。マクルーハンによれば電子メディアは人間の中枢神経組織を拡張したものであり、これにより再び声の文化におけるより身体感覚的な経験の形式が回復され、それと共に地球大の規模で部族的相互依存関係が復活する。これが「グローバル・ヴィレッジ（地球村）」という概念である。重要なのは、これが単なる情報網の地球規模での網羅を意味するのではなく、「より全身感覚的なコミュニケーションの可能性」を説いたものであるということであろう<sup>(21)</sup>。

マクルーハンのこうした独特な表現は、70年代に入ると急速に忘れ去られるものの、80年代後

半以降、再び再評価されることになる。これはコンピュータ技術の発達が、あたかもマクルーハンの「グローバル・ヴィレッジ」の予言を実現しつつあるように見えたためであろう。マクルーハンが目指したものは主にラジオなどの「声」による地球村の出現であったが、パソコン通信の誕生により、多少その形態を変えながらも、地球規模のネットワーク実現の予言は成就されるような期待が、否応にも高められることとなった。「真の精神的なコミュニオン」の実現を期待した前述の『ヴァーチャル・コミュニティ』も、そうした文脈の中で語られるものとしての位置づけが可能であろう。

## (2) マクルーハンの視座に対する社会決定論<sup>(22)</sup>的批判

ケヴィン・ロビンスは、電子メディアの空間を「現実世界およびその混乱に対するオルタナティブだと考えるのは、いささか安易すぎる」<sup>(23)</sup>として、マクルーハンやヴァーチャル・コミュニティの楽観論に抗するため、メディア空間を形成するテクノロジーの背景に社会的・政治的な領域を持ち込もうとする。ヴァーチャル文化は民主主義的な発想から生まれたのではなく、差異や不均衡や葛藤にあふれる社会からの避難、退却のために作られた、きわめて政治的な領域であると主張する。

同じくイギリスのロジャー・シルバーストーンはさらにメディアと政治学の関連性を強調するメディア論者の一人である。「メディアについて研究する者は、われわれの関心の対象である世界にかかわっていく責任をもつべき」<sup>(24)</sup>であるとし、メディアとメディアが操作し枠付けている環境との間の相互連関に着目すべきであると主張する。つまり、マクルーハンの技術決定論的視野と社会決定論的視座の循環の把握を必要とすると説く。シルバーストーンが提示したメディア論に必要な視点は次の5つである。(1) 他のテクノロジー同様にメディア・テクノロジーもまた社会的である。(2) メディアは文化的な諸力として政治的である。(3) メディアはこれまでつねに政治的プロセスの重要な一部であり続けてきた。(4) メディアは常に変化し、メディアを支える社会との関係もそれに応じて変化している。(5) われわれは多次元的な世界に生きている。

「私としては議論を社会的・政治的な領域へと持ち込みたかったのである」<sup>(25)</sup>と弁明するように、ロビンスをはじめ、社会決定論的な視座の必要性を説く人々は、現実空間と電子空間の二つの世界の連続性を説明する必要性を強調したかったのである。彼らは電子空間を豊かなものと見なすために、現実との結びつきを欠いたユートピア論となることを批判した。シルバーストーンの提示した五つの視点もまた、メディアと社会力学的プロセスとの関係を根本的に再検討する必要があると感じたために提示されたものである。これらの視点はロビンス、シルバーストーンが共にイギリスのカルチュラル・スタディーズの中心人物であるという背景も確かにある。だがそれ以上に重要なのは、それまでのメディアやオンライン空間に対する言説が自己完結的であり一方的であり機能主義的、かつ楽観主義的色彩が強いものが多かったという背景があったということであり、ロビンスらがどのような思想的背景を持っていたにせよ、彼らの指摘は、少なくとも従来とは異なるメディアへの視座の必要性を説いたことには相違ないのである。

## (3) 「遊」的属性としてのメディア空間の意義

メディア社会学の加藤晴明は、日常生活世界からオンライン空間へ移行する際、利用者は様々な制約からの解放を経験すると述べるが<sup>(26)</sup>、これを集約させると「身体」と「社会的属性」からの解放であるといえる。身体的な解放とは、外見や表情、身体的な動き、性別、紅潮やまばた



きなどの心理的な反応などからの解放を指し、社会的属性からの解放とはその人の職業や居住地、またハンディキャップなどからの解放を指す。これらは自らがその情報を発信しない限り、他者には知られることのない個人属性であるが、こうした身体性や属性からの解放を得ることにより、全ての参加者が対等な立場で対話をする権利を得ることができると言えよう。

日常生活世界における境界の殆どが一旦リセットされ、均一化されるというこの空間の性質は、メディア論の枠組みでは「遊」の概念を用いて説明されることが多々ある。

遊びの時空へ入るということは、何かを後にして—ある特定の種類の秩序を後にして—敷居を越えることであり、独自の規則、独自の交渉と行為の言葉に定義されたそれまでとは異なる現実と合理性の世界へ足を踏み入れることである。(27)

これはシルバーストーンの記述だが、氏によればポストモダンの世界においてますます不明瞭になる「公と私」「聖と俗」「表舞台と裏舞台」「現実的なものと幻想的なもの」「内的現実と外的現実」「個人的なもの和社会的なもの」などといった境界と敷居の問題を語るにあたり、「遊びの概念がそうした問題を考えていく上で重要な道筋となることを発見してきた」という(28)。この氏の言う「遊び」という概念は、主にカイヨワの遊びの概念を基軸としたものであるが、こうした境界の問題を扱う際にはシルバーストーンならずとも、例えば日本でも井上俊が若者文化を説明する際に真面目な世界（聖）と現実世界（俗）の中間領域として「遊」の領域を設けることにより、若者文化をアイデンティティ形成のために必要不可欠なものとして捉えているが、これは現実世界からの解放（井上は「離脱」と記す）によって「生活」ないし「俗」の次元を離れた生の領域をも体験することがなければ、パーソナリティの全体的統合は難しいためだと述べている(29)。

「異なる次元におけるリアリティの体験は、より高い、またより本来的な自己とリアリティに近づいて行くことができ、そうすることが充実した人生の鍵である」(30)とするならば、インターネットという空間上に形成された「意識の共同体」ともいえる集まりもまた、充実した生を送るための一手段であり、積極的な参加行動の一つと見なすこともできよう。

#### (4) 「シミュラクル」としてのメディア空間の空虚性

「CMC 空間がユートピアをもたらす」という楽観論に対する批判は、社会的背景の欠如という視点からの他に、「その空間自体が潜在的に持つ空虚性」という視点からもなされる。これはポストモダンの相対主義・脱中心化といった思想と相まって、力を増してきたものである。そして時間の経過によって、何よりも CMC 空間に対して、より多角的で冷静な分析が増え始める。先に挙げた、CMC に肯定的な未来を予想した『ヴァーチャル・コミュニティ』も、そうした中で批判の対象となっていく。ここでもロビンスの批判を中心に、その記述を具体的に見ていきたい(31)。

ロビンスは、ラインゴールド的な CMC 論について「明確な反響を呼び、魅力を備えている。新しいテクノロジーの秩序の状況下において、適切な社会的行為の哲学を有しているように見える」(32)と積極的な意義をもつものと受けとめる。そして、「われわれは、以前よりも拡大したかたちでの、新しい連帯の感覚や経験を探求しなくてはならない。そしてもちろん、ヴァーチャル・コミュニティが目指しているのもこのことである。電腦空間における連帯は、小さな街のゲマインシャフトを、国境を越えたグローバル・ヴィレッジへと拡張したもののように見える」と、ヴァーチャル・コミュニティの持つある種の「力」肯定的に評価しつつも、その連帯感や充足

感には「どこかいかかわしいものがある」と疑問を投じる<sup>(33)</sup>。ロビンスはオンライン上のヴァーチャル空間は、いわゆるシミュラクルであるとし、そうした空間をディズニーランドの空間になぞって、ソーキンやボードリヤールの言説を援用しつつ次のように述べる。

マイケル・ソーキンは、もう一つのポストモダン空間ともいべき「ディズニーランド」について、次のように述べる。「(ディズニーランドは) 都市を形成しないアーバニズムを喚起する……オーラを剥ぎ取られたハイパー都市である。何十億もの人がいるが、住民のいない都市」。ジャン・ボードリヤールは、「(ディズニーランドは) 冷凍保存したわれわれの全歴史を解凍した、完全に合成的な世界だ」という。ヴァーチャルなネットワークによる関係も、同じように見れるのではなからうか。それは、コミュニティの呪文ではあっても、社会の形成ではない。「グループマインド」はあっても、社会的な<sup>エンカウンター</sup>出会いはない。オンラインのコミュニケーションはあっても、超空間に住民はいない。これもまた一つの合成された世界であり、歴史は凍結されている。古い形式の連帯やコミュニティを、シミュレーションとして保存しているだけではないか。畢竟、オルタナティブな社会とはなり得ず、社会に対するオルタナティブなのである<sup>(34)</sup>。

ロビンスによれば、ディズニーランドと電子メディアの空間の性質には相違がないという。ディズニーランドには時間の流れが存在しない。時間が流れないので生や死が存在しない。そこは社会や歴史から切り離された、永遠に現在な世界なのである<sup>(35)</sup>。シミュラクルの世界という意味においては、ラインゴルドの体験したオンライン空間での出来事もディズニーランドでの体験も変わらないというのがロビンスの見解である。人の住む痕跡もなく、歴史や伝統が累積され得ない空間で展開されるのは、虚構に満ちた「イベント」でしかないのである。

以上、メディア空間に関する以上4つの視座の示すものは、その空間の独自性と実社会との連続性、空間に対する肯定的側面と否定的側面という両義性である。電子メディア空間を巡って多くの側面が語られるということは、すなわちその空間の持つ多義性が不安定さを生み出すことを意味すると言ってよいだろう。電子メディア上で実際にサイトを興すということは、その混在性に直に触れなければならないということでもある。

そもそもパソコン自体が矛盾を孕んだ背景の中から生まれたものであった。パソコンは、中央権力のツールである汎用大型機に対抗する「人民のためのコンピュータ」であり、「解放のツールとして」歴史上に登場したという背景を持つ。リベラルな個人が各自の思考能力を向上させ、平和で民主的な社会を築いていく。そのようなアメリカの対抗文化的思考によって、パソコンというツールは支えられてきた<sup>(36)</sup>。しかしその民主的なパソコンの設計者を啓発したのは、(間接的にではあるが) 軍事技術者であり、その軍事技術者が開発したシステムは、軍事研究の第一人者で、国防のための科学技術研究の必要性を説くことによって、実際にそのような国家的組織を作り上げた人物だったのである<sup>(37)</sup>。

つまりパソコンにはその出自からして反権力的側面と、権力支配的側面が元々混在していたことになる。パソコンという一つのメディアに対して複数の背景が存在するように、パソコンによって創出された電子メディア空間に対しても多くの期待や危険が混在する。ましてや不特定多数の他者がその空間において「直接的に」交流し、相互に影響を与えうる CMC 空間に対しては、

実社会に強力な基盤を置く宗教やその公式サイトが消極的・慎重になり、基盤の薄い個人・より周辺の宗教が積極的になるのは、決してその宗教の実社会とのインタラクションと無関係ではないように思われるのである。

### おわりに 宗教的交流の場としての CMC 空間に関する展望と問題点

宗教サイトにおける CMC をめぐる以上の考察から導き出されるのは以下の点である。

一つは、「公式サイト」の持つ CMC 空間構築の限界性である。CMC、特に BBS は不特定多数の参加者によるメッセージによって初めて成立するため、その内容はきわめて流動的であり、会話内容の展開が常に変化する。その流れや発言がサイトの場として相応しくない状況になったときの制御には、「公式」ならではの困難さが付随する。発言ひとつを削除するにもその理由が問われることがあるだろうし、質問に対する回答ひとつでさえ、その発言の背後には「公式見解」という暗黙の認識を相手に与えることになることは充分あり得ることである。さらにインターネットは宗教的悩み等の真剣な声とそうでない声と同じ地平で扱われる場でもある。いわばインターネットという存在自体が一種の混沌であり、そうした地平に対して実社会の地平で成立していた組織体系による管理が果たしてどこまで可能なかは、「公式」サイトに今なお課せられた課題であろう。

もう一つは、CMC による霊的コミュニティの永続性の問題である。「公式サイト」ならではのジレンマは、個人運営サイト、しかも実社会との直接的なコミットメントの薄い精神世界や新霊性運動系列のサイトでは解消されやすい。CMC によるオンラインコミュニティなどの脱領土的な精神的ネットワーク構築は、ある程度はサイト管理者の手腕に委ねられる部分もあるものの、比較的容易に形成可能である。しかしそのネットワークの弱みは、場の維持がその管理者当人にかかっていることである。「心霊学研究所」も、当面は閉鎖の予定は皆無と思われるが、サイト維持のためのサーバ負担などの経済的状況や、実生活における事情といった、現実的な諸問題のために、いついかなる事情でサイト運営が困難になるかも分からない。そのような不安定さから電子メディア空間は免れることができない。どんなに質の良い精神的交流の場であったとしても、維持者の意向一つでその場が消滅することもある。そのような儚さはオンラインコミュニティが潜在的に持っている宿命なのである。これはシグムント・パウマンが言うところの「クローク型共同体」とも呼べるようなものであろう。全てが流動的な現代において、この共同体も変わりやすく、一時的で、一面的である<sup>(38)</sup>。同じ目的のために集まるものの、やがて人々はそれぞれの日常の場へと戻っていかなければならないのである。

しかしながらオンラインコミュニティが、持続性を持ち、体験を共有することによって個々人が深いアイデンティティを持ちうる、いわばベラーの言うところの「記憶の共同体」<sup>(39)</sup>となる可能性も、現時点では楽観的な期待はできないものの、全くの皆無だと言い切ることも、まだできないのではないとも考えられる。現在のところはインターネット自体の歴史の浅さと前例のなさから、その可能性について述べるに過ぎないが、サイトのコンテンツを仲間などが引き継ぐというケースは実際に存在する。コンテンツというハードと、そのサイト維持に対する精神というソフトの受け継ぎが「適切に」なされれば、あるいは全く同じコンテンツを引き継がなくとも、同じような志を持つ者が存在すれば、そのコミュニティは少しずつながらも寿命を延ばすことが

できるかも知れない。オンライン上で築かれる精神的な交流の深さによっては、そうした共同体の形成の可能性も、ないわけではないと思われる。

今回の考察では触れることが出来なかったが、例えば一教団や組織に属していながらそれとは独立した形で、その教義をメインコンテンツとして個人的にサイトを開設し、他者と宗教的交流を展開しているというケースや、組織・集団運営的な体制をもつニューエイジや精神世界関連サイトについての動向など、今回取り上げたパターンの中間をなすような位置にあるサイトの動向などにも注目する必要がある。これらに対する個別研究は既に存在するが、それらが宗教とインターネットという大きな枠組みの中でどのような位置にあるのかを考える際、そうした様相を総合的に俯瞰する視座も必要になってくるのではないかと感じられる。

いずれにせよ、「公式」サイトのコミュニティ拡充と新霊性文化的な個人サイトのコミュニティ永続性、多様な側面をもつがゆえに不安定とされる電子メディア空間においてこれらの問題がどのような展開を見せるかを探るには、さらなる時間経過が必要であろう。

### 主要参考文献

- 会津泉 『パソコンネットワーク革命 -日米最前線レポート-』日本経済新聞社, 1986年  
 —— 『進化するネットワーク』NTT出版, 1994年  
 江下雅之 『ネットワーク社会の深層構造 -「薄口」の人間関係へ-』(中公新書 1516), 中央公論新社, 2000年  
 大澤真幸 「電子メディアの共同体」『メディア空間の変容と多文化社会』(青弓社ライブラリー 5), 吉見俊哉, 大澤真幸, 小森陽一, 田嶋淳子, 山中速人, 青弓社, 1999年  
 大平健 『純愛時代』(岩波新書), 岩波書店, 2000年  
 桂英史 『メディア論的思考 -端末市民の連帯意識とその深層-』青弓社, 1996年  
 島菌進 『現代救済宗教論』青弓社, 1992年  
 —— 『精神世界のゆくえ -現代世界と新霊性運動-』東京堂出版, 1996年  
 Silverstone, Roger. *Why Study the Media ?* SAGE Publication, London.1999 (ロジャー・シルバーストーン『なぜメディア研究か -経験・テキスト・他者-』吉見俊哉, 伊藤守, 土橋臣吾訳, せりか書房, 2003年)  
 土佐昌樹 『インターネットと宗教-カルト・原理主義・サイバー宗教の現在-』(叢書 インターネット社会), 岩波書店, 1998年  
 西垣通 『マルチメディア』(岩波新書 339), 岩波書店, 1994年  
 —— 『聖なるヴァーチャル・リアリティ -情報システム社会論-』(21世紀問題群ブックス 23), 1995年  
 乗越たかお 『アポクリファ』河出書房, 1991年  
 Heim, Michael. *The Metaphysics of Virtual Reality*, Oxford University Press, 1993. (マイケル・ハイム『仮想現実のメタフィジックス』田畑暁生訳, 岩波書店, 1995年)  
 Bauman, Zygmunt. *Liquid Modernity*, Polity Press Limited, 2000. (シグムント・パウマン『リキッド・モダニティ』森田典正訳, 大月書店, 2001年)  
 浜日出夫 「マクルーハンとグールド」『メディアと情報化の社会学岩波講座 現代社会学第 22

巻』岩波書店, 1996 年

McLuhan, H. Marshall. *Understanding Media: The Extensions of Man* McGraw-Hill, New York, 1964. (マーシャル・マクラーハン『メディア論 一人間の拡張の諸相』栗原裕, 河本仲聖訳, みすず書房, 1987 年)

吉見俊哉 「シミュレークルの楽園 ー都市としてのディズニーランドー」『零の修辞学 ー歴史の現在ー』多木浩二・内田隆三編, リプロポート, 1992 年

Rheingold, Howard. *The Virtual Community: Finding Connection in a Computerised World*, London, Secker and Warburg, 1994 (ハワード・ラインゴールド『ヴァーチャル・コミュニティ ーコンピューター・ネットワークが創る新しい社会ー』会津泉訳, 三田出版会, 1995 年)

Robins, Kevin. *Into the Image: culture and politics in the field of vision*, Routledge, 1996 (ケヴィン・ロビンス『サイバー・メディア・スタディーズ ー映像社会の〈事件〉を読むー』田畑暁生訳, フィルムアート社, 2003 年)

## 註

- (1) 2003 年 11 月現在で, yahoo!において「宗教」カテゴリー内のサイト数は約 2200, 詳細カテゴリーは「科学と宗教(7)」, 「カルト(10)」, 「サイバーカルチャー(2)」, 「宗教別(2156)」, 「神学校(1)」, 「スピリチュアルリーダー(12)」など。ただし yahoo!のサイト登録は自己推薦制かつ審査制であるため, ある程度の充実したコンテンツを含んだサイトを探すには適しているが, これだけで宗教サイトの全貌を網羅できるわけではない。
- (2) 日本の精神世界とアメリカなどのニューエイジやその周辺の運動群は, 同じグローバルな運動, 宗教文化の地域的な現れとして, 島薮進によって 1991 年以降「新霊性運動」もしくは「新霊性文化」と称されている。本稿で述べる CMC 交流の諸相は, 必ずしも運動群として社会に対し積極的な働きかけや緊張関係を保持しているわけではないため, 「新霊性文化」と表記を統一しておきたい。
- (3) 本稿の内容は, 日本の事情に限定されていることを予め断っておきたい。インターネットと宗教に関しては, アメリカと日本ではその捉え方も異なるだろうし, さらに日常生活とインターネットとのインタラクションについての視野も入れるならば, 韓国と日本の間でさえもその様相はかなり異なってくる。各国の諸事情と比較するというよりは, 日本におけるインターネットと宗教に関する現状について触れるのが本稿の目的である。
- (4) 『ヴァーチャル・コミュニティ』は, 今では「古典」と評される書であるが, そこで語られる CMC 体験に関する記述は, こんにちの日本の CMC 体験者にとっても共有できるものであろう。現在様々な場面で語られる CMC 体験も, 10 年前のそれと根底に大きな差は感じられない。CMC をいち早く網羅的に扱ったことにより, 当時大々的に評価されたという意味で, 『ヴァーチャル・コミュニティ』は CMC 研究に関する一種の「教科書」的存在と見なしてもよいだろう。
- (5) ハワード・ラインゴールド『ヴァーチャル・コミュニティ ーコンピューター・ネットワークが創る新しい社会ー』三田出版会, 1995 年, p.13。
- (6) ラインゴールド, 前掲書, p.46。
- (7) ラインゴールド, 前掲書, pp.46-47。
- (8) 大平健『純愛時代』(岩波新書), 岩波書店, 2000 年, pp.44-45。
- (9) 乗越たかお『アポクリファ』河出書房, 1991 年, pp.192-193。
- (10) 例えば伊藤雅之「ネット恋愛のスピリチュアリティ」『スピリチュアリティを生きる ー [新しい絆

を求めて] -』榎尾直樹編，せりか書房，2002年などを参照。

- (11) 近年議論になっているように，この用語の使用には慎重さが要求される。ここでは便宜上「従来の宗教という言葉の持つ概念に当てはまらない領域における，高度な意識段階への変容や，そうした意識をもたらすゆるやかなネットワーク感覚」という意味に限定しておきたい。
- (12) 『現代救済宗教論』によれば，新靈性運動の主な特徴は「意識変容を究極的なものへ至るきわめて重要な指標と見る」「自然や人間の中に内在する神的なものや靈的なものを尊ぶ」「一神教に代表される超越者依存型の宗教文明や合理主義的物質文明を越える新しい靈的文化への移行の中に生き，参加していると信じる」「自立的な個人の覚醒による靈性開発の必要性を説く」「科学と宗教（靈性）は合致するものである」などが挙げられる（島菌1992：pp.235-238）。
- (13) こんにち最も語られている「スピリチュアリティ」とスピリチュアリズムは，ここでは別のものとして認識すべきである。スピリチュアリズムは靈魂の存在を認め，死後の魂の不死性を主張する思想で，19世紀半ば頃から，アメリカやイギリスを中心に爆発的に展開した宗教的思想である。日本にも浅野和三郎等によって大正時代に輸入された。特定の教祖は存在せず，多くの靈媒によってもたらされた靈的メッセージが主なテキストである。現在日本でも50冊以上の関連本が翻訳されているが，便宜上ステイントン・モーゼス著『靈訓』，モーリス・バーバネル著『シルバー・バーチの靈訓』，ジョージ・オーウェン著『ヴェールの彼方の生活』が日本ではその代表と見なされている。これら著作に共通して見られるのは「既成宗教の否定」「靈魂の不滅」「個人の実践による宗教の尊重」などの主張である。
- (14) 「心霊学研究所」URL <http://paperbirch.com/>（2003年11月現在）。
- (15) これにより，「データベース」「トランザクション」「コミュニケーション」といったインターネット全般の基本的要素（会津泉の分類による）を網羅した総合サイトという一面を示していると言えよう。これは「インターネット」という空間における「情報」「物」「人間」という三次元の流動を一つのフィールドで総合的に扱っている例としても興味深い，ここではそうした側面の紹介にとどめておく。
- (16) 「財団法人 日本心霊科学協会 (<http://www.shinrei.or.jp/>)」というサイトが存在するが，厳密には「日本心霊科学協会」と，「心霊学研究所」のようなスピリチュアリズムの潮流は，その源流が同じでも必ずしも思想的に一致するものではないことは注意しなければならないだろう。協会の主な活動は心霊現象の科学的研究であり，自らが「宗教的」であることを否定する。これは源流である英国スピリチュアリズムの思想潮流が，心霊現象を科学によって解明しようとすることにより心霊の存在を明確なものとしようとする「心霊科学」，霊界からのメッセージを根拠とし，霊界や靈魂の不滅を信じる，より宗教的色彩の強い「心霊主義」の二大潮流に分かれていることに起因する。現在に至るまで，日本においてはこの二つの潮流は混在されて認識されているきらいがあるが，厳密に言えば「日本心霊科学協会」は「心霊科学的」，「心霊学研究所」は「心霊主義的」である。この二つの潮流が新靈性文化とそれぞれ独立してどのように関わっていくかについてはさらなる考察が必要であるが，ここでは便宜上，現代において二者は別の潮流に属するものであり，「心霊学研究所」は個人の超越性や意識の変容，靈的生活の実践に対してより積極的であり，より宗教的であると認識する。
- ここで述べるのは，こうした個人の実践に重きを置く「心霊主義的」な色彩のスピリチュアリズムが，大きな組織や団体を作ることは，殆ど確認されていないということである。
- (17) 日本基督教教団西東京教区公式サイト URL <http://members.jcom.home.ne.jp/uccj-nishitokyo/>（2003年11月現在）
- (18) 西東京教区のサイトに限らず，このような懸念からBBSを設置しないという宗教教団サイトは多いと思われる。こうした問題点については「シンポジウム インターネット時代の宗教」国際宗教

研究所編『インターネット時代の宗教』（2000）も参照。また、設置以前からこのような懸念が生じたということは、オンラインコミュニティに対する否定的イメージが肯定的イメージよりも先行していたことを示していると言える。インターネットを通じた個人情報漏洩や（薬物販売等の）犯罪幫助、そしてなによりも「荒らし」等によるサイトイメージの低下に繋がることに対する懸念なども考えられよう。

- (19) 1999年シンポジウム「インターネット時代の宗教」での、宗教教団側の一発言より。「インターネットを通し、Eメールでもって個人的な質問、あるいは社会のことについて質問が来た場合に、即座に答えたいし、皆、実は個人だったら答えられるのです。ところが、組織を代表した答えをするといった場合には、組織がそういうふうにはできておりません。」（『インターネット時代の宗教』pp.131-132）。運営者側からの発言が公式発言と見なされかねない以上、公式サイト上での自由な対話の場が設置しにくいという現状を示していると言えよう。西東京教区のサイトも同じような問題に直面していたということを示している。
- (20) マクルーハン『メディア論 一人間の拡張の諸相-』1987年、p.8。
- (21) 電子メディアを拡張された身体と考えるマクルーハンの主張だが、これはいわゆるサイバネティック文化的な思想とは一線を引くものである。というのは、マクルーハンが電子メディアに求めていたのは「声」の文化の復活であった。電子メディアによって地理的距離が無化され、電子的に媒介された同時的な場の構築を希望するその背景には、彼の「声への愛着」がある。朗読家を母に持ち、ディベートを好み、改宗カトリック者であった彼が電子メディアに価値を置いたのは、あくまで電子メディアが「文字の文化」に取って代わり再び「声の文化」を復活させるという意味においてである（浜日出夫「マクルーハンとグールド」『メディアと情報化の社会学岩波講座 現代社会学第22巻』岩波書店、1996年、p.106）。

教会のミサで響く声こそ、この調和を象徴するものである。そして、マクルーハンが電気メディアを肯定的に評価していたあいだ、かれが「グローバル・ヴィレッジ」のなかにみていたのは、いわば「電気の教会」であった〔浜1996：p106〕

マクルーハンのこの希望は、70年代に入ると次第に悲観的な見方へと変わっていく。メディアは彼にとって「身体と声を遊離する」ものとなった以上、そこには何の価値も見出せないものとなっていく。「身体から遊離した人間」、つまりイメージの世界に没入する人間のイメージは、まさに後のサイバー・パンクの世界を彷彿とさせるが、同じメディアと人間との関連性を見ても、マクルーハンのそれはより有機的でホリスティックなものであったと考えるべきである。

- (22) 補足：社会決定論的メディア論について

マクルーハンの技術決定論とは逆に、メディア形成にはその背後に社会的・政治的力学が存在し、それがメディアを形成せしめたという視点が、レイモンド・ウィリアムズによって提示されている。ロビンズが「議論を社会的・政治的な領域へと持ち込みたかった（ロビンズ『サイバー・メディア・スタディーズ 一映像社会の〈事件〉を読む-』2003年、p.134）」というのも、ウィリアムズ的視座に立ったメディア論の必要性を感じていたと言って良いだろう。

レイモンド・ウィリアムズはマクルーハンとは異なる視点でメディアへの関心を示す。マクルーハンがメディアを人間拡張の媒体、人間の思考や行動を決定するものと見なしたのに対し、ウィリアムズはそうしたメディアがいかなる社会的背景によって担われてきたのかという視点に立ってメディアを分析する。いわゆる社会心理学的・数量的なコミュニケーション研究とは訣別したウィリアムズにとって、メディアは様々な政治的、経済的、社会的な力が絡まり合う場のなかでこそ結晶化するのであり、最初からその制度的形態や利用のされ方が決められていた訳ではないのである。技術と社会、メディアと日常生活は歴史の積層のなかで入り組んだ関係を結んでいると彼は主張する。

こうしたわけで、ウィリアムズの主張はマクルーハンのメディア論にも厳しい評価を下している。

前述の通り、マクルーハンはメディアを最初からある固有の特性を持つものであると見なし、そうした特性が人間の感覚秩序を一方的に変容させると説いた。マクルーハンのこうした視点は、結果的にメディア形成の背景にある社会変化がメディアを形成した過程を見落としているものであるとし、ウィリアムズはマクルーハンの技術決定論的なメディア理解を批判したのである。

- (23) ロビンス, 前掲書, p.134。
- (24) ロジャー・シルバーストーン『なぜメディア研究か 一経験・テキスト・他者』せりか書房, 2003年, p.308。
- (25) ロビンス, 前掲書, p.134。
- (26) 加藤晴明『メディア文化の社会学』2001年, p.111。
- (27) シルバーストーン, 前掲書, p.137。
- (28) シルバーストーン, 前掲書, p.136。
- (29) 井上俊『死にがいの喪失』1973年, pp.70-71。
- (30) 島菌進『精神世界のゆくえ』1996年, p.31。
- (31) ここで批判のための文献として取り上げるのはロビンス, 前掲書の第4章「電腦空間と、われわれの生きる世界」である。この章はサイバーカルチャーに関するさまざまなアンソロジーにも収録されており、多くの論文で引用・言及されており、電腦空間論として一種の「古典」の位置を獲得していることから、カルチュラル・スタディーズの視点から見たメディア論の代表として用いることにした。
- (32) ロビンス, 前掲書, p.130。
- (33) ロビンス, 前掲書, p.131。
- (34) ロビンス, 前掲書, p.131。
- (35) ディズニーランドをはじめとする遊園地とコンピュータネットワークを構成する電子メディアの同質性は、他のメディア論でも認められる。桂英史は『メディア論的思考』において次のように述べる。「セットアップされた都市のソフトウェアモデル。[...] それは花が咲き乱れる講演のように爛漫でおおらかな空間でもある。そして、「見えざる遊園地」。僕たちの日常には、境界もなく一定の構造物も必要としない遊園地が広がっている。コンピュータネットワークを構成する電子メディアという「見えざる遊園地」である(桂英史『メディア論的思考 端末市民の連帯意識とその深層』青弓社, 1996年, p.35)。
- さらに、ディズニーランドの永遠性については、たとえば吉見俊哉「シミュラクルの楽園 都市としてのディズニーランド」『零の修辞学 歴史の現在』(アルク出版, 1992)年も参照されたい。吉見はドルフマンとマトゥーラルの説を援用しつつ、ディズニーランドで我々が経験するのは、一種の「生成的な時間性の喪失」(pp.111-112)であると述べる。
- (36) 西垣通『マルチメディア』1994年, pp.72-73。西垣によれば、パソコンというアイデアは、1968年にアラン・ケイという人物によって生み出されたという。ちょうど世界中に反体制の学生運動が盛り上がった年でもあり、28歳だったケイは軍隊に属していたものの、ベトナム戦争自体には反対であった。
- (37) それゆえ西垣ははっきりとパソコンを「アメリカ文化の申し子そのもの」と断言するのであるが、この点については他の場を設けて論じなければならない部分である。ちなみにここで述べられた軍事技術者はダグラス・エンゲルバート、電子工学者とはヴァネヴァー・ブッシュである(西垣, 前掲書, p.83)。
- (38) シグムント・パウマン『リキッド・モダニティ』2000年, pp.257-258。
- (39) ベラー『心の習慣』1992年, pp.186-189。ベラーによれば、真の共同体とは、伝統や物語の継承やそこから導き出される生き方を実践することによって、個人が深いアイデンティティを得ること



## 宗教サイトにおける CMC 空間の諸相について

ができるようなものであるとし、それを「記憶の共同体」と呼んだ。オンラインコミュニティが一面的な共通項しかを持たない人々による集合体である「ライフスタイルの飛び地（ベラー，前掲書，pp.83-88）」から，こうした「記憶の共同体」というべきものとなり得るかはまだ未知数といわざるを得ない。

**CMC (Computer Mediated Communication) on Religious Websites:  
A Comparison of the Websites of an Organized Religion  
and a New Spiritual Movement**

Kaoru ENOMOTO

The development of the Internet has changed the way we communicate in daily life. Expectations and anxieties concerning Computer Mediated Communications (CMC) are now being studied in many fields, including religious studies.

There is a difference between websites operated by traditional organized religions and those administered by representatives of “New Spiritual Culture” groups. The former have a tendency to only offer basic information, such as teachings, schedules and a basic FAQ, and rarely set up online bulletin boards. Contrary to this, New Spiritual Movements tend to establish relatively open forums where participants enjoy communicating with each other and consider CMC a meaningful way for them to reveal their “true selves.” CMC can therefore operate as a venue for individual spiritual empowerment.

In this article, an official website of an organized religion, the West Tokyo Parish of the United Church of Christ in Japan, and a private spiritualist website, the Shinreigaku Kenkyūjo, are taken as examples of different online communities. Differences between these sites stem from the relative intensity of their interactions with “real” social world and the appearance of multiple perspectives (sometimes paradoxical) on the Internet, which at times also confuse the website administrators. These difficulties explain the reason why people who operate religious websites, especially websites administered by organized denominations, are reticent to establish communication spaces for the general public.